マタイ 7:13-21「狭き門、狭き道」

「狭い門から入りなさい。滅びに通じる門は広く、その道も広々として、そこから入る者が多い。しかし、命に通じる道はなんと狭く、その道も細いことか。それを見いだす者は少ない。
偽預言者を警戒しなさい。彼らは羊の皮を身にまとってあなたがたのところに来るが、その内側は貪欲な狼である。あなたがたは、その実で彼らを見分ける。茨からぶどうが、あざみからいちじくが採れるだろうか。すべて良い木は良い実を結び、悪い木は悪い実を結ぶ。良い木が悪い実を結ぶことはなく、また、悪い木が良い実を結ぶこともできない。良い実を結ばない木はみな、切り倒されて火に投げ込まれる。このように、あなたがたはその実で彼らを見分ける。
わたしに向かって、『主よ、主よ』と言う者が皆、天の国に入るわけではない。わたしの天の父の御心を行なう者だけが入るのである。かの日には、大勢の者がわたしに、『主よ、主よ、わたしたちは御名によって預言し、御名によって悪霊を追い出し、御名によって奇蹟をいろいろ行なったではありませんいか』と言うであろう。そのとき、わたしはきっぱりとこう言おう。『あなたたちのことは全然知らない。不法を働く者ども、わたしから離れ去れ』」

まことの命に到る道は、たいへん狭い、と今日の聖書で言われております。その狭さたるや、どれほどでありましょうか。

狭い門を考えますときに思い浮かべますのが、日本の伝統的な茶室に入口として設けてあります「にじり口」であります。戦国時代の武将たちは、鎧を身につけ、刀を携え、いつでもおのれの身を守り、いつでも攻撃の姿勢を保っておりました。しかし千利休が茶室の入口として考案しました「にじり口」は、そのままだったら入ることができない、たいへん狭い作りになっております。「にじり口」を通って茶室に入り、お茶を一服するためには、武将たちは、鎧を脱ぎ捨て、刀を手放し、頭を床にすりつけ、身をウサギのようにして入らなければなりませんでした。

一椀のお茶を喫するためだけに、おのれの身を固めているもろもろを全部脱ぎ捨てなければならないとしたら、ましてわたしたちは、まことの命に与るために、どれほど多く脱ぎ捨てなければならないことでしょうか。

まことの命に到る道は、たいへん狭い、と今日の聖書で言われております。その狭さがどれほどであるかについて、さらに考えさせられますのが、ロシア正

教会に伝わっております「三位一体のイコン」であります。イコンと申しますのは、正教会に伝わる独特な技法で描かれました、歴史のある宗教画でありますけれども、今より六百年の昔、ロシアが戦乱に明け暮れておりました十五世紀にアンドレイ・ルブリョフという修道士が描きました「三位一体のイコン」というのがございます。これは、父なる神、子なる神、聖霊なる神が静かに語り合っていたもうお姿を、三人の天使の絵でもって表そうとしたイコンであります。このイコンを眺めていますと、父なる神、子なる神、聖霊なる神のお交わりの真ん中のところへ、白い布で覆われたテーブルが据えられているのがわかります。そうして、テーブルをよくよく見ますと、正面のところにほんの小さな四角い窓が開けてあるのがわかります。この白いテーブルというのは、祭壇になっておりまして、祭壇の中へ殉教者の骨を収めるようになっております。殉教者の骨を入れるためにこしらえてあるのが、この小さな四角い窓なのであります。このイコンが表わそうとしている真理はこういうことです。すなわち、わたしたちキリスト者は、この小さな四角い窓を通って入って行くことで、三位一体の神との深い交わりに与ることができるのだけれども、そのためには、もういろいろと余分なものを捨てるというだけでは全然足りない。わたしたちはついに自分の命まですっかり手放して、殉教者となって、小さい骨になるのでなければ、この小さな四角い窓から入ることができない。まことの命に与るとは、それほど狭い門であるということを、この「三位一体のイコン」が表わしているのであります。

こういうことを考えますときに、わたしたちは次のような主イエスキリストの御言葉を思い起こさせられます。主イエスはこのようにおっしゃいました。

「わたしについて来たい者は、自分を捨て、自分の十字架を背負って、わたしに従いなさい。自分の命を救いたいと思う者は、それを失うが、わたしのために命を失う者は、それを得る」(マタイ 16:24-25)

もちろんここで言われていますことは、単に形式的に殉教者になりさえすればよい、単に形式的に骨になりさえすればよい、単に形式的に小さくなりさえすればよい、ということではありません。

ここで本質的に問われておりますのは、いったいわたしたちの人生を動かしているところの動機、ほんとうの動機は何か、ということであります。

わたしたちはただ単に、おのれの欲を満たすためだけに、おのれの腹を神とし

て、腹に仕えて生きているのだろうか。それともわたしたちは、神を神とし、神に仕えるために生きているのだろうか。わたしたちの人生を動かしている動機。ほんとうの動機が問われているのであります。

「サンジャックへの道」という映画がございます。サンジャックへの道と言いますのは、南ヨーロッパに古くからあります巡礼の道です。フランスの古い都ルピュイから出発しまして、ピレネー山脈を越え、スペインの北西端にありますサンチャゴ・デ・コンポステラの大聖堂を目指して歩く巡礼の道です。サンチャゴへの道、フランス語ではサンジャックですが、この「サンジャックへの道」という映画には、中年の三人のフランス人の兄妹が出てまいります。三人はお母さんの遺言によりまして、遺産を相続する条件としてサンジャックまで足で歩いて巡礼しなさい、と命じられるのです。もともと仲が悪い三人は、巡礼案内人に連れられて、不平不満をこぼし、悪態をつき、喧嘩しながら、とぼとぼ歩いて旅をいたします。そうまでして歩き続けるのは、もちろんお金が欲しいからにほかなりません。ところが、巡礼の道の真ん中に来たところで、案内人は三人にこう告げるのです。「ここまでで結構です。お母様の遺言では、ここまで来れば条件は全部果たしたものとみなす、と書いてございます。ですからもうおうちへお帰りになって結構です」　しめた、これでお金はもらえた、というわけです。しかし、三人のうちの長男が叫ぶのです。「いやだ。わたしは最後まで歩き続ける！」　こうして三人は、なおも巡礼の旅を続けることになるのですが、そうなってきますと、この先歩き続けるのは、もうお金のためなんかじゃない。自分の欲のためなんかでもない。動機というものが、すっかり変わってまいります。動機が変わりますと、歩き方が変わってまいります。それまでリュックにしこたま詰め込んで背負っていた、あのもの、このもの、どのものも、もういらなくなってしまって、とうとうリュックサックごと放り捨てて、身ひとつになって、軽々と歩くようになります。

主イエス様は、わたしたちキリスト者の道は狭い、とおっしゃいました。それは、ただ単に入口が狭いというだけでありません。入口から入る前から、もうだんだん先細って行く道であります。入口から入った後は、なおさらどんどん先細って行く道になっております。なぜそんなになっているかと言えば、それは、わたしたちが余計なもの、余分なもの、非本質的なもの、偽りのもの、見せかけのものを、ことごとく捨て去って、身軽になって、そのようにして、主イエス様にあるまことの命に深く与ることができるようにされるためであります。

主イエス様はおっしゃいました。「狭い門から入りなさい。滅びに通じる門は広く、その道も広々として、そこから入る者が多い。しかし、命に通じる道はなんと狭く、その道も細いことか。それを見いだす者は少ない」

広い道を歩くのであれば、広い門から入るのであれば、わたしたちは、おのれの腹と神様とを天秤にかけて比べるようなことは、なんにも迫られずに済むのです。広い道を歩くのであれば、広い門から入るのであれば、わたしたちは、おのれの欲と神様とを天秤にかけて量らなければならんようなことは、なんにも考えずに済むのです。そんなこと全部無しで済ませられるなら、なんと楽な道でありましょうか。

しかしわたしたちは、広い道ばかり歩き、広い門ばかり入るわけにいかないのです。それはパウロがこう申し述べている通りです。

「何度も言ってきたし、今また涙ながらに言いますが、キリストの十字架に敵対して歩んでいる者が多いのです。彼らの行き着くところは滅びです。彼らは腹を神とし、恥ずべきものを誇りとし、この世のことしか考えていません。しかし、わたしたちの本国は天にあります」（フィリピ 3:18-20）

主イエス様を救い主と信じて歩むということは、いつでもそういうことを考えさせられる道を歩むということであります。すなわち、いつでも悔い改めを促されながら歩むということでありまして、わたしはほんとうのところ果たして、何を動機として生きているんだろうか。わたしはほんとうに、ひたすらイエス様を愛して生きているんだろうか。それとも実のところ、おのれの腹を神として、おのれの腹を愛して、そんでもって、イエス様というのはただおのれの腹を満たしてくれる便利な道具に過ぎないという程度でもって、イエス様を小器用に使いながら、生きているんだろうか。こういう痛いところをいつでも問われながら生きるということが、主イエス様に従って生きるということであります。

さて、偽預言者というのは、神に仕えるふうを装いながら、その実おのれの腹に仕えているという偽者の教師でありまして、大変上手いことを申しますから、もしわたしたちが、おのれの腹を神として生きているようでしたら、わたしたちは偽預言者の誘いの文句に、コロッと騙されてしまう危険がございます。

主イエス様はおっしゃいました。「偽預言者を警戒しなさい。彼らは羊の皮を身

にまとってあなたがたのところに来るが、その内側は貪欲な狼である」（マタイ 7:15）

偽預言者というのは、元来おのれの腹ばっかりに仕えている教師でありますから、その語る誘いの文句というのは、わたしたちの腹に甘く甘くしみとおるものがございます。すなわち、この信仰であなたはこれこれこういうふうに上手く行きますよ、だから一生懸命この信仰にお励みなさい、というような誘い文句です。

こういう誘い文句でもってやって来るんですけども、その主眼とするところは、あくまでおのれの腹、おのれの腹第一であります。そこにおいてイエス様が占めている位置っていうのは、ただおのれの腹を満たしてくれる便利な道具に過ぎないという程度にイエス様を上手く使ったら良い、という扱いであります。

こういうイエス様を自分の思い通りの便利な道具に使いながら生きて行こうとするのが、広い道であり、広い門であり、楽な道でありまして、そこではぜんたい、おのれの欲と神様と、おのれの腹と神様と、どっちを選び取るんですかというような、身を削られるつらい選択、身の縮む選択というのは、ちっとも問われることがない、どこまでも平らかな、どこまでも滑らかな道であります。

しかしイエス様は、おのれの腹を神として、神をおのれの腹の道具として生きる生き方の最後の結末というものを、鮮やかに示しておいでです。こう言われております。

「わたしに向かって、『主よ、主よ』と言う者が皆、天の国に入るわけではない。わたしの天の父の御心を行なう者だけが入るのである。かの日には、大勢の者がわたしに、『主よ、主よ、わたしたちは御名によって預言し、御名によって悪霊を追い出し、御名によって奇蹟をいろいろ行なったではありませんか』と言うであろう。そのとき、わたしはきっぱりとこう言おう。『あなたたちのことは全然知らない。不法を働く者ども、わたしから離れ去れ』」（マタイ 7:21-23）

その結末は、こうであります。

たとい預言をし、悪霊を追い出し、奇蹟を行なう力ある信仰者であったにしても、最後の事の結末においては、そのほんとうの動機が、心の根っこにあったところのことが、問われるのですよ、ということであります。たとい預言をし、

悪霊を追い出し、奇蹟を行なう力ある信仰者であったにしても、実のところただイエス様を自分の腹を満たしてくれる便利な道具という程度に使っていたのに過ぎないのであれば、結末でイエス様から「おまえなんか知らない。誰だ？」と言われてしまう、というのであります。

反対に、預言なんかしたことがない、悪霊を追い出したこともない、奇蹟なんか行なえないという、まことに小さな信仰者、目立たない信仰者、地味な信仰者、名を知られること無き信仰者でありましても、ひたすらイエス様を愛して、ひらすらイエス様をあるじとして、ひらすらイエス様に導かれて生きてきた、それは、おのれの腹のためにイエス様を使うなんてことじゃない、おのれの腹をすっぱり捨てて、ひたすらイエス様について歩いて来た、そういう信仰者が、ほんとうの命にあずかるのだ、いや、すでにしてその人は、ほんものだ。すでして、ほんとうの命を生きて来たのだ。それが結末において明らかになる、ということであります。

さてでは、わたしたちは、いつでもすっぱりおのれの腹を捨てることができているか、と言えば、それは途端に心もとないところであります。

わたしたちは、キリスト者としての歩みの中で、ある地点、ある時、ある一点において、大切な決断を一回しなければなりません。それは、まったく自分をイエス様におささげする祈りをすることであります。「イエス様。わたしの腹があるじなのではありません。イエス様、あなたがわたしのあるじであります。わたしはあなたについてまいります」という決断の祈りであります。

そうして、その後ずっと続いて行くキリスト者の道のり、行程において、いつでも自分に問わなければなりません。「イエスこそわたしのあるじである、というのが、ほんとうになっているだろうか？」という自問自答であります。そこがアーメンであるならば、感謝なことですし、そこがアーメンでないならば、わたしたちはいつだって悔い改めなければなりません。

主イエスこそわたしのあるじである。それはほんとうか？　ほんとうになっているか？　ここを自覚的に問うこと。問い続ける必要があることについて、パウロはこう述べております。

「滅びに向かっている古い人を脱ぎ捨て、心の底から新たにされて、神にかたどって造られた新しい人を身に着け、真理に基づいた正しく清い生活を送るよ

うにしなければなりません」（エフェソ 4:22-24）

外務省の元官僚で論客として知られるキリスト者の佐藤優氏は、このように言っております。「神が、自らのひとり子をあえて人類で最も悲惨なイスラエルの人々の『最も深い深淵』に送り、イエスキリストが神の子であるにもかかわらず、十字架にかかる死刑囚への道を自覚的に選択していったということが、われわれにとっての人生の選択基準なのだと思う。平たく言うと、よく考えた上で、より難しい選択をしていくと言うことなのだと思う。しかし、何をもってより難しい選択と判断するかについてのマニュアル化は不可能で、個々の状況の中で真摯に判断するしかないであろう」（佐藤優『獄中記』308 ページ）

難しい状況、それが狭い門であります。難しい状況において、わたしたちが、まことのあるじであるイエスキリストのために勇気をしぼって正しい決断するならば、そこに喜びがあります。そこにほんとうの喜びがあります。永遠の喜びに直結したところの、ほんとうの喜びがあります。キリスト者とは、どこまでもイエスをあるじとして生きることによって、ほんとうの喜びに生きる者であります。G. K. チェスタートンはこう申しました。「イエスは弟子たちに三つのことを約束なすった。まったく恐れがなくなること。無性に幸せでしかたないこと。いつでも試練が絶えないことである」

ナチスが統治しておりましたドイツにおきまして、多くのユダヤ人が逮捕され強制収容所に送られ命を奪われていた時代のことです。ある日、あるキリスト者の家族が、あるユダヤ人の家族をかくまおうといたしました。しかし、そこで立ち止まって逡巡いたしました。もし秘密警察にばれたら、ユダヤ人の家族ばかりでない、自分たちまで死ぬような目に遭うのではないか。恐ろしくなりました。そこで、牧師に相談することにいたしました。相談を聞いた牧師は、こう答えました。「わたしたちは洗礼を受けた者じゃないか。何を恐れることがあろうか」　そこでキリスト者の家族は勇気をふるって、ユダヤ人の家族をかくまうことにしたというのです。

「わたしたちは洗礼を受けた者じゃないか。何を恐れることがあろうか」

パウロが申しております。「あなたがたは知らないのですか、キリストイエスに結ばれるために洗礼を受けたわたしたちが皆、またその死にあずかるために洗礼を受けたことを。わたしたちは洗礼によってキリストと共に葬られ、キリストの死にあずかるものとなりました。それは、キリストが御父の栄光によって

死者の中から復活させられたように、わたしたちも新しい命に生きるためなのです」（ローマ 6:3-4）

「わたしたちは洗礼を受けた者じゃないか。何を恐れることがあろうか」

パウロが申しております。「わたしたちは、キリストと共に死んだのなら、キリストと共に生きることにもなると信じます」（ローマ 6:8）

狭い道を自覚的に選ぶということ、狭い門から自覚的に入るということは、実にこのこと、古いわたしがキリストと共に死に、新しいわたしがキリストと共に生きる、ということであります。それは救世軍歌 245 番に歌われている信仰の境地でもあります。

１節　われをきよめて　ただ主のために
　　　生きまた死ぬる　ものとしたまえ

２節　おのれに死にて　キリストにいき
　　　かみのみ座（くら）と　ならしめたまえ

先週の水曜日より、わたしたちは四十日間の受難節に入っております。わたしたちキリスト者はいつだって、こういうことを考えなければなりません。「イエスがわたしのあるじである。ほんとうか？　古いわたしが死に、新しいわたしが生きている。ほんとうか？　ほんとうになっているか？」

しかし、受難節においては、わたしたちキリスト者は特に心を注いで、このことを考えなければなりません。「イエスがわたしのあるじである。ほんとうか？古いわたしが死に、新しいわたしが生きている。ほんとうか？　ほんとうになっているか？」

「ほんとうにそうしてください」という祈りをわたしたちはする必要があります。お祈りいたしましょう。

祈り

恵み深い天の父なる神様。わたしたちは今年も、主イエスキリストの十字架の

みわざを思い起こす四十日間の受難節を迎えております。どうかこのとき、もう一度わたしたちが、自分の人生のほんとうの動機について、わたしたちの心の根っこにあることについて、見直すことができますように。キリスト者であると言いながら、自分の欲、自分の腹のためばかりに生きているとしたら、それは、ほんとうではありません。どうかわたしたちが、主イエスキリストと共に十字架につけられたのだということ。わたしたちがキリストと共に死んだのだということを、もう一度思い起こさせてください。どうかわたしたちが、主イエスキリストと共に復活させられたのだということ。キリストがわたしたちの内に生きていたもうのだということを、もう一度思い起こさせてください。今わたしたちは、古い自分をその罪の行いともろ共に脱ぎ捨てて、上から、キリストにかたどられた新しい自分を身に付けたいと願っております。どうか、そのようにしてくださいますように。わたしたちをきよめるあなたのみわざを、今日おこなってくださいますように。主イエスキリストの御名によってお祈りいたします。アーメン